



畫本鶯宿梅

三

13
1798
1-1



明
1795
卷



畫本鶯宿梅卷之三

目錄

董奉
空中老子
呂洞賓
長秦君
翠
虛
馬師皇
雍門
牧

葛玄
張道陵
吳道子
兒
江妃二女
劉
師
曠

藤野澤氏遺愛之記

明治四十一年四月廿四日

藤野澤氏寄贈

七九

畫本鶯宿梅卷之三

空中老子

太上老君。老子と號なづと生なる。白しろその。面おもて黃き。
 白長耳。鉅目。羨うらやま。廣ひろ。穎えい。疎そ。齒は。方かた。口くち。有あ。李り。樹じゆ。
 と物ものて。此こゝ。吾われ。姓せい。さうと。漢かん。文ぶん。帝てい。老子らうじ。れ。負おし。と。好この。
 使つか。と。師し。と。曰い。わ。老らう。君きん。曰い。道だう。尊そん。德とく。貴き。一いつ。遠えん。と。
 問もん。帝てい。乃な。曰い。普ふ。天てん。の。下した。王わう。去こ。小せう。わ。と。と。云い。事こと。は。色しき。樂らく。
 帝てい。乃な。曰い。普ふ。天てん。の。下した。王わう。去こ。小せう。わ。と。と。云い。事こと。は。色しき。樂らく。
 公こう。の。濱ひん。王わう。居い。よ。わ。と。と。云い。事こと。は。色しき。樂らく。域いき。中ちゆう。四し。わ。り。大だい。
 王わう。一いつ。居い。る。子こ。道だう。わ。り。と。り。と。も。從したが。勝しょう。が。民たみ。を。り。



屈するのあはれいづて。何ぞ乃高あつて朕貧
 賤富貴をさしむるふはつと。須臾して老君と
 ら貴と附て坐しるが躍る。冉とてあつて
 中ふあつて雲乃昇がどく。地とまらと百好文
 ありて玄意よとゆら。良之と俛して答へ曰今
 上天よとと。中人よ類せと。下地よ居らと。何
 ぞあはれと氏とするのあはれ。陛下とるんぞと富
 貴を負賤る。さあじや。帝乃悟。是神人から
 とありて。韓と下つて。稽首して。禮謝と。帝り
 道德二經と授く。其後づくとるく。身とと

葛玄

葛玄字の孝先。葛仙公と號と。左慈は後と丹液
 仙經と受膏て。客と對して。戲て。能變化の事と
 あり。石と物て。人のいづと。約して。先徳。龍。燕。雀の屬
 と。指て。龍。舞。経。並らる。人。の。状。乃。あ。く。或。者
 冬。い。ま。る。氷。素。と。殺。ま。夏。の。氷。雪。と。い。ふ。事。又。教。十
 後。と。し。て。人。は。あ。ら。て。井。の。中。に。投。せ。免。一。葉。と。并
 の。子。を。持。て。後。と。呼。ぶ。さ。此。の。鏡。を。あ。く。亮。わ。り。あ
 具。術。多。く。皆。戲。と。い。ふ。事。と。記。し。膏。て。是。主。に。あ。ら
 て。各。記。す。事。約。三。江。口。と。云。所。は。い。づ。り。て。俄。と。あ。き

空中老子



風よわひく。船多く漂没せり。仙の船も亦行方
 ちねども。是を嘆じて曰。葛仙公。道術ある人なるふ
 何ぞい難と免ゆ事わらばらんと。ちねよ宿と
 踰て忽仙公水と歩來と身入。流よれが。
 酒よ醉ら態る。謝て曰。昨ハ伍子胥強邀て
 我と爲て船心。是とてく淹屈ととり仙公乃
 神美甚し。後仙とありてわら

予按らるふ。しりくを盡く所の上利劍とよ
 仙人の當。劍よ素淡と好む所傳とある人なむ。
 報らくい葛仙公と盡くものあらんら



葛仙公歩上

書本齋宿梅三

董奉

董奉字君異。交州刺史。杜燮。云人毒。与奉病。死。三日奉。三丸乃愈。燮口中。内。生。须臾。以。中。后。奉。山。间。小。居。水。与。呪。人。之。病。与。活。与。钱。物。与。取。与。愈。者。以。杏。五。株。又。种。者。以。一。株。与。栽。与。也。与。与。收。与。以。杏。七。万。株。根。与。得。与。林。与。行。与。岸。の。群。獸。樹。下。に。捨。因。以。孝。与。生。也。一。輩。倉。与。化。与。杏。与。賣。杏。一。釜。与。取。者。以。穀。一。釜。与。倉。中。小。置。一。以。杏。与。取。与。多。者。以。虎。与。以。与。色。一。以。杏。与。地。与。傾。与。也。以。虎。与。多。与。以。因。以。取。者。以。奉。以。穀。也。以。以。負。窮。与。救。与。也。



本草綱目卷之三

五

張道陵

張道陵字輔漢子房八世孫身長九尺二寸
 七歲而得道德經通天文地理皆其奧也極
 心子鶴鳴山隱居弟子王長云者乃天文
 と習ひ黄老に通じ相も小龍虎の文舟と煉成
 神人の者よ山嶺中峯れ石室より地と堀
 て丹書と得たり是より飛約自在の妙術悉く得
 已。須帝壬午正月十五日夜真人天樂の聲と
 大上老君素車に乗じ五白龍車と駕し雲中
 にはく真人は勅して曰。近蜀中に六大鬼神あり

て生民と暴深く痛魚。子吾とありは代
 活。則子初之量少と名と丹臺を録せんと三
 十六部乃真經と真人は賜真人老君は命に
 蜀の青城山に往て退治す。魔王鬼神億万
 の鬼共出顯し。遙く真人は向て云師行と云
 我居處と奪真人云汝等衆生と猪害と云
 小なて汝と伐て老君は命と守と。鬼神固て怒
 億万の衆鬼と會して真人と圍害せんと。王長曰
 邪鬼甚衆。奈何。真人曰。子恐らむと云。吾
 即らむと却んとて。丹筆とて邪鬼は向て一畫

されば衆鬼一同に地は仆て起らぬとあり。六魔
 五衰て云今より去て來らぬとて念とた
 かんやと云。真人許して再畫されば群鬼悉く
 起る。再生する事と得ら。真人は鬼と心服せん
 事と欲して云汝と名法カとおんと鬼帥と法
 術と競。真人或いは入る焼と水入る溺と。鏡と
 と透してお入。自在の術と力と。鬼帥居及つと鬼又
 八の夫虎と化して海き木とじ。真人一乃獅子と化し
 て。されと遊べ。虎奔あげら。鬼帥亦八の夫龍と化
 と。真人金翅鳥と現し。龍の眼と啄し。龍多し

遁り真人師一大石と現すと。重と萬餘斤。藕絲と
 以て。鬼帥と鬼帥と。二の鼠と。其絲と鬚
 あり。後よ。潜土人とす。鬼帥同聲小長と
 告て。生んぬと云。去て再害せと。生民活たらん
 事と得ら。其後真人。王長切成て正一真人。其
 と授く。白眉に昇天しぬ

呂洞賓

呂巖。字洞賓。唐貞元年中人なり。面色黃白
 如て。風眼眉鬚。入たの眉。角小黒子。わり
 身圍長八尺二寸。華陽巾と頂き。黃襦衫と衣

て太皇太后と繫狀張子房と類と唐山と遊び大
龍真人と遇て天遁劍の法と傳唐の會昌年中
長安酒肆と遊て一羽士青巾白袍なり。啓小
三絶句と書するくと身入。洞賓其狀奇古めて
詩を飄逸なりと評て揖して其姓氏と問再拜
して坐して羽士曰一絶と吟と。予子志とみ
しと欲と。洞賓筆ととりて書して曰生在儒家
遇太平懸纓重滯布衣輕誰能世上爭名利
欲事天皇上玉清羽士約と身入て曰吾ハ雲房
先生なり。居終南山の鶴嶺に在子能從入遊

じや。洞賓たまご應と。雲房因てとり不肆中り
懸ハ雲房自為と炊めると。洞賓忽抗と就
て睡夢く初年年榮後十年衰一身子孫と
しと窮若憔悴して馬と風雪の中と立と恍然
とと夢覺て炊の尚と。執事と。雲房笑
て吟とて曰黃梁猶未熟一夢到華胥洞賓
驚て曰先生我夢とあるや。雲房曰子ハ適來汝
針沉萬熊榮悴千端五十年此間一瞬なり。汝
得と喜と。何と。喪も何と悲と。是と。世と。天のつて
後人世のハ大夢とありなり。洞賓感悟して遊と



卷之四十四

張道陵
 鬼帥



卷之四十四

雲房と辨して度せし術と求洞賓雲房の道と
 火龍真人天遁劍法とと得て如江淮よ持てゆく
 靈劍と試すは蛟害と除隠顯變化四百餘年
 常小湘潭岳鄂及兩浙作難の間よ持て人
 少と識めしなり



呂洞賓
 逢羽士



吳道子

吳道元字道子。初の名は道子。後の字とると陽
 翟の人なり。少して書と加知章張顛の学ぶと
 ともなる。因て畫と名ふ。いふごとく冠せり。ふ深く
 微妙より。蓋天性。湯らる。のめて。積習して
 能ひる所はあつと。明皇召入。供奉とす。此より
 名と天下に振。六年張僧繇と所法と。其畫
 の妙。驢と畫。夕夕。踏む。是名わら。然と
 畫て晴と然と。忽雷聲とす。壁と破て。花
 雨と。畫。鱗甲。飛動す。わら。天より。時

ハ。煙霧と生。人物と畫。け。八面生意。活動わ
 了。圓は百代の畫聖なり

畫龍譜曰。龍の身。一雲中に遍滿して。能變化
 とす。水氣と借。雲霧と起。雲盈とす。其位
 甚下。或一首一爪と見。其隱顯變化自在と
 と。雲霧より。龍の位。其顯處一爪あり。その
 脇と能わら。え。雲の。入。濃。雲。て。じ。く。と
 う。が。に。濛。く。ら。ん。と。く。鍛煉とす。雲。一。天。は。霧。と
 して。其。居。る。所。雲。あり。と。得。る。事。なる。龍。を
 泥水の中に物あり。と。か。す。め。る。時。泥。の中。より。物。躍

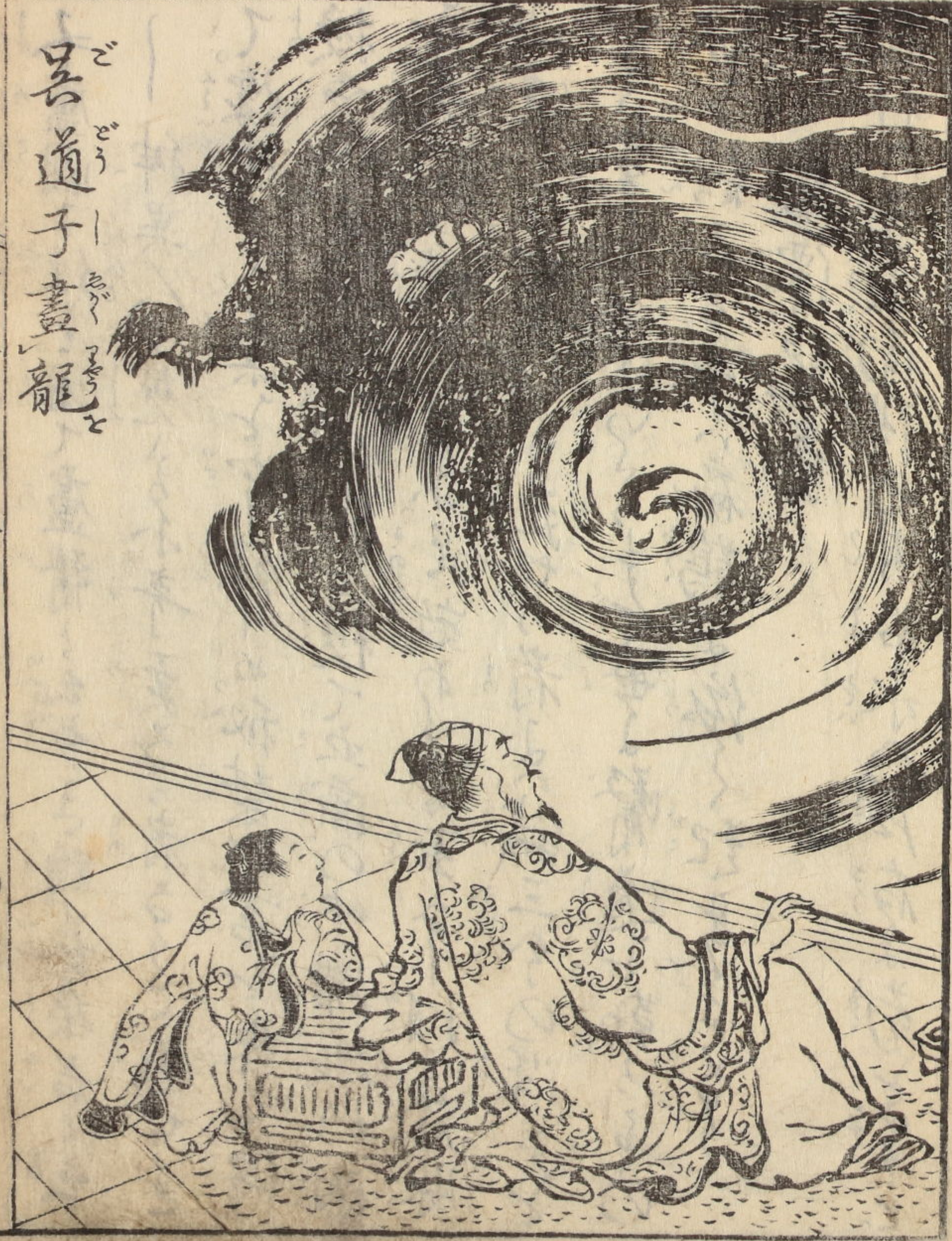
切つ時流じと目と目そちる。重なる龍の形を
とて。龍頭の時雲霧風
雷電して山川震動する。其形とわ
らばより。黄帝先帝十二章に龍の飛
り。聖人の龍鳳と知りて。畫ゆ龍鳳の神伝の
系より。僧繇吳道子曹弗興の畫する神
妙は。聖人の意よ。かきよ。妙なる。妙なる
。今龍と象る者。法聖人の記ふ。其變化
と。寫弗興陳所翁僧牧溪の筆跡と。字の
る。和珅も僧明北僧雪舟友松の妙筆。唐

ふらりとと古く稱せり。今畫塔の天井は。蟠龍と
畫初唐の井中龍あり。其形身々。水底に龍の
の。龍と云き。水は。後と。水底に龍の
居と。身が。あはと。蟹觴と。曹弗興溪
中小赤龍ありと。字して。吳主孫權と。後雨と
いの。け。畫と。水多と。忽雨と。記せり。龍の
水氣と。所と。龍の形と。火災と。除と。云
。滅と。妙筆の人なり。畫る。竹ぞ。其效るんや

長桑君

扁鵲の秦越人と云。周の代乃末。戦國の時人なり。

呉道子畫龍



畫本卷之三

畫本卷之三

又盧國^{まろこく}は佳^{ちやう}と因^よて盧醫^{ろい}と云^いふ時^{とき}長桑君^{ちやうそうきん}と云^いふ
 一^{ひと}神異人^{かみいじん}は見^またりふ奇^き美^みる者^{もの}ありと感^{かん}せしき
 て懷中^{かいちゆう}より藥^{くすり}と出^でりけし秘禁^{ひきん}の書^{しよ}と悉^{こころ}く傳^{つた}
 授^よたり是^{これ}より人の病^{やまひ}と視^みて五藏^{ござう}の中^{ちゆう}滞^{たい}礙^{がい}の病^{やまひ}
 と考^{かんが}へし療治^{りやうぢ}するふそ効^きわらざる事^{こと}ありけし診^{しん}脈^{みやく}
 小^{ちひ}達^{たつ}して名^なと得^えたり死^しせらる者^{もの}あり鍼^{しん}三分^{さんぶ}の深^{ふか}さを
 つく生^いれしと今^{いま}よりるまで世^よに醫道^{いどう}と勤^{いそ}むもの
 脈^{みやく}と診^{しん}する事^{こと}は扁鵲^{へんかく}は依^よりて起^{おこ}せりとの事^{こと}あり
 菊^{きく}潭^{たん}兒^に童^{どう}
 抱朴子^{ほうぼくし}は云^いふ南陽^{なんやう}の甘谷^{かんこく}水^{みづ}乃^{すなは}ち右^{みぎ}右^{みぎ}の菊^{きく}と生^なじ

扁鵲逢神
人傳醫

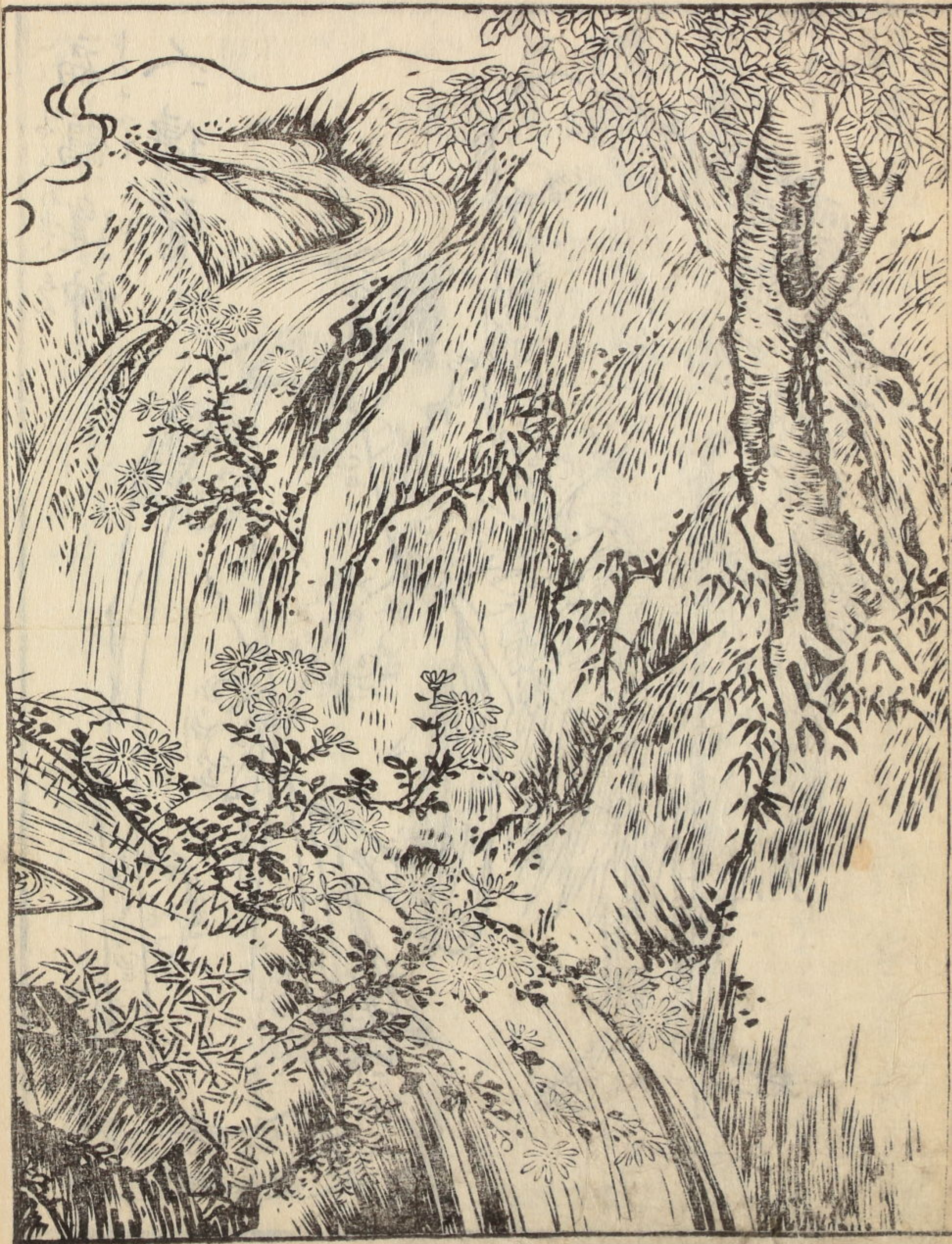


菊
潭
兒
童



書
五
本
卷
の
百
九
十
三

〇
十
六



書
本
卷
の
百
九
十
三

〇
十
五

羽
卒
虚
驅
龍



三
十
三
日
甲
子



三
十
三
日
甲
子

花其中そのうちは落人おちひと其水そのみづと飲のちは多おほくい壽いずみよりて菊潭きくたんと號なづし。○應あへ却さか風俗ふうぞく通とおじ。南陽なんやう鄧縣とうけん甘谷水かんこくみづは。甘羨かんせんする。其山そのさんとよ大菊おほきくあり。花水はなみづは落おちて山さんより流ながる。其流液そのりやくと得うるる。谷中やちゆうに二十餘ふたじゆ家井けいせいと穿うがじ。此水このみづと飲のちる壽いずみ。菊華きくけは身みと輕かろし。氣きと益まし。人を堅強けんきやうるとし。故ゆゑ三九六十二さんじゆうろくにじふにの法はふといく。丸藥がんやくとる。し。あはを服はくする事こと。一年いちねんあく白髮はくはつと黒くろは變へんじ。三年さんねんあく八十歳はちじゆうさいの老翁らうおう兒童にじゆうとる。神效しんけうあり。因ゆゑ今いま家けは畫所えすところあり。ちより云い慈童じじゆうと別べつる。なり。筆硯紙墨ひつえんしぼくの類るいと添そふぐに。

陳翠虛

陳翠虛ちんすいこ字南木しよなんぼく。權けんと盤桶ばんづくと箍くわといく。年としと。後のち太乙たいい刀圭たうけい金丹きんたんの法はふと。毘陵びりやう禪師ぜんしは得え景霄けいせう大雷たいらい琅書らうしよと。黎姥れいぼ山神さんしん人は得え。純符じゆんぷ水みづとて去さと捨する病びやうと愈いふ。時とき久ひさ呼よべ陳泥丸ちんていがんとい。時とき髪かみと披かきて。鷄衣けいゐ百結ひやくけつ塵垢ちんこ身に滿み終日しゆうじつ爛らん。解かいと膏蒼梧かうそうこはゆ。郡ぐんは早はやと禱いたふ。遇翠虛ぐすいこ。鉄鞭てつべんと執潭しやくたんよりて龍りゆうと驅く。須臾しよゑあて雷雨らいふ去さ。少せう郡ぐんの人ひと息恨いきこんと得える。江妃かうい二女にによめ

江妃二女の何の件の人と云事とあるとある時
鄭交甫と云人江湄よわて遊二女ふり佩るふ
の瓊の珠と解てあはとわふ交甫行くと教十
歩みて女忽見くとと珠も亦隨て失とら山海
経よ湘江の二女の舜の二妃娥皇女英なりと
書と是一圖めて二品分ると

馬師皇

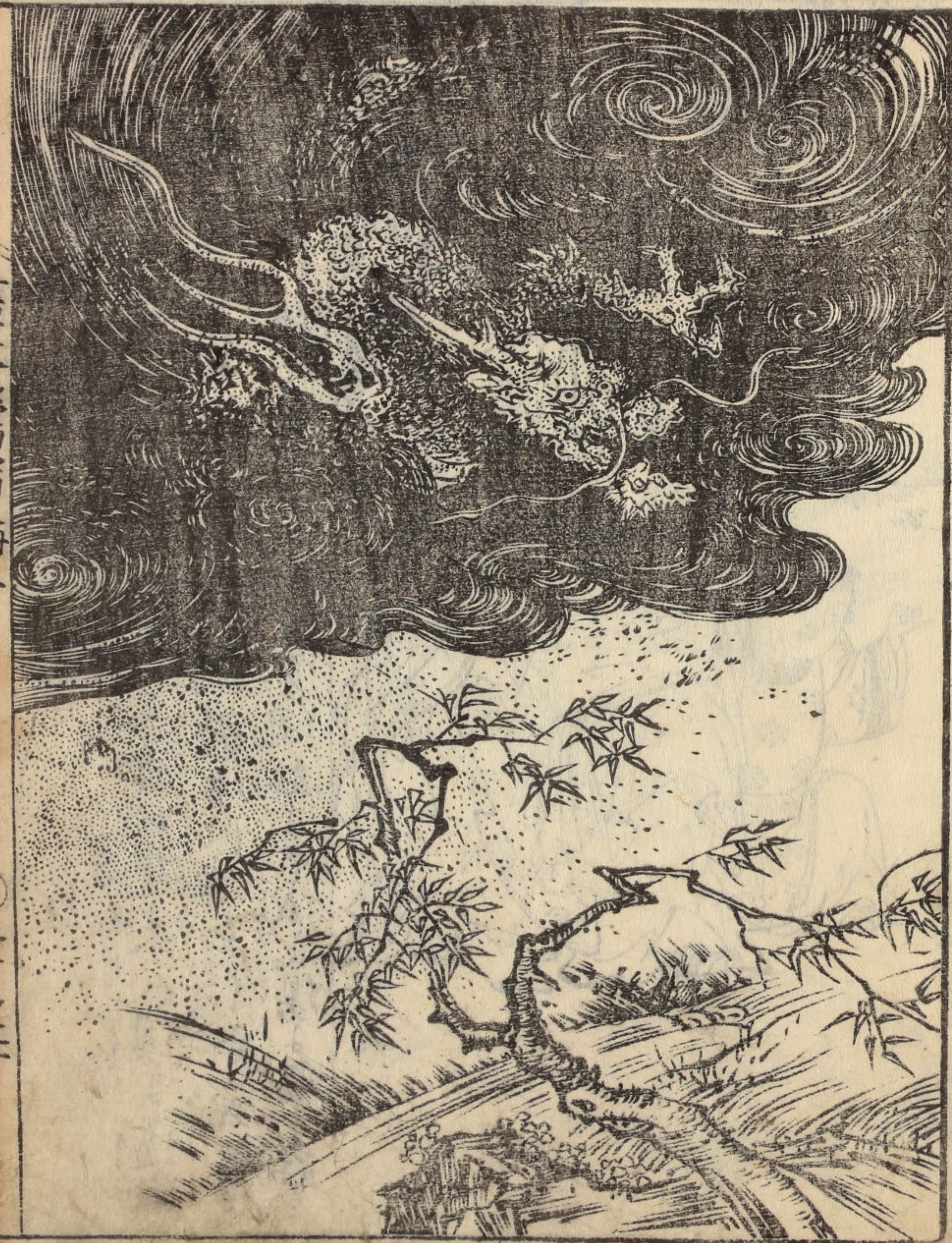
馬師皇ハ黄帝の時馬と治らる醫なり後新下
皇てあはる向年と垂口と張師皇曰此龍病わ
里我能と知と云て其唇の下に針とて鼻へ

甘草湯と飲しむる。忽作とらとらり

江妃二女



江妃二女



皇太子御馬



馬師
皇
駿
馬

書本
卷宿
梅三

十六

劉綱

劉綱字伯鸞。晉人。士虞令。乃其妻之樊夫人。俱有道術。綱常以夫人之其術。較之。或曰。綱盤中。以唾。其魚。夫入。又唾。其魚。猶。有。其。魚。食。綱。每。子。其。子。俱。子。勝。其。子。

劉綱



樊夫人





雍門
泰の孟嘗君樂に
わきまをえ。抱の表
とあふらるる其
は雍門と云くわり
琴の名人と云く
人感よ入つるるん
わきまへん教と傳
し。あつてをををを
ををを。嘗君は
と傳前雍門のさ
る術と弾人乃
んとまははは。壁
りる慈聲と弾
じるとも。我まは行
のあつわん。び



陸士衡豪
士賦曰
落葉後微
風以墮
善寡
孟嘗遭雍門
而泣琴曲已
未

て剛をいとを雍
門と抱せてなり。
嘗君曰客ハ琴を
弾ドて人とくか
くしときあふの
し所りゆら
らは分理と珠と秘
術とけつて我と
るるしびと内
雍門琴の調と
くそのて。弾や
りまはるるはな
るお。嘗君はさ
慈と傳し。忽激を
わくわくと



書本堂宿禰三

三十三



梅花帶
雲
琴上

師曠

琴に白雪乃曲あり。師曠と云く夏れ暑小若と琴の道。
白雪曲と弾く。天太子曇つと雲あり。琴のふよ花かりしとあり。

書本堂宿禰三

三十三

牧笛

牧笛ハ牛と牧子の吹笛なり。早暮振来群牧馬と
かよの笛と和をとり。嘗て村野の間は吹てありと
受とらん。時和歳豊なり事とありに蜀トてあり。毎よ
指と換し。因畫録物とあり。古くは年れ風相と雲はりの也
牧童寒笛倚牛吹笛



